比喩の謎々あそび

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学文芸研究会 公開日: 2009-02-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 川合, 高信 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/1173

比喩の謎々あそび

川合高信

先きの小論「フランソワーズの古代法典」(文芸研究第五十四号)に於て、マルセル・プルーストのユーモア比喩の構造について考察し、比喩によるユーモアの源泉は、喩えるものと喩えられるものとの間の、価値観の心理的格差に基くもの、という結論を得たが、実はプルーストには、ややこれと趣を異にする別種のユーモア比喩がある。

それは比較的短文の単純な比喩であり、しかも、いかにも機知に富んだ、洒落た印象を与える一群の比喩である。

幾つか例をあげてみよう。

〈(メゼグリーズの野原のはずれに迷い出て、ぽつんと一本咲くひなげしや、なまけてしんがりに残った何本かの矢車草は)あたかもタピスリーのふち飾りのように、土手のここかしこを飾っていた。(I. p. 138)〉

〈たった一本のひなげしが、その綱具の端に赤い信号旗を掲げ、油じみた黒い浮標(ブイ)の上にそれをはためかせているのを見ると、私の心は高鳴るのであった。あたかも海にほど近い地方を往く旅人が、陸に上げられて船大工の修理している小舟を眼にして、まだ見ぬさきに「海だ!」と叫ぶように。(I. pp. 138-139)〉

前の例は、野原に群生しているひなげしや矢車草が、野の周辺部にも散らばって咲いている様子を、つづれ織のふち飾りに見たてたもので、これはおそらく〈mettre des fleurs en bordure (花でふち飾りをする)〉という慣用句を踏まえており、一種のパロディ比喩と云えよう。

後者は一見長文だが、二つの比喩が連らなっているのであって、前半はひなげしをブイの上にひるがえる信号旗に喩え、後半はその海のイマージュを引継いで、陸に

上げられた小舟と、仲間を離れて野末に咲くひなげしとを結びつけている。[1] あたかも、海辺の町で見かける修理中の小舟が、ほど遠からぬ海の存在を予告して旅人の胸を躍らせるように、野に入る手前にただ一輪咲いているひなげしは、これから行く野原のひなげしの花盛りを告げている、という比喩関係になっており、ひなげしと小舟の相似に加えて、旅人と散歩者の暗合が言外に語られている。

また、同じくタンソンヴィルの庭園には〈においあらせいとうが、古いコルドヴァ革の淡く香ぐわしいバラ色の巾着の、初々しい口を開けていた。(I. p. 140)〉

〈においあらせいとうの花の色と形を、コルドヴァ産のなめし革の小銭入れになぞらえているが、コルドヴァという地名から招来されるイベリアのイマージュは、その庭園の主、スワン氏の娘ジルベルトの、モール人ふうの黒い瞳の色（この瞳ゆえに話者の恋心はつのるのである）と呼応しているものと思われる。

そして、当のジルベルトが不意に話者の前に姿を見せた時、〈(私の眼ざしたるや）すべての感覚が不安に石と化して、眼の窓からいっせいに身を乗りだしていると云った眼ざし（I. p. 141)〉であった。

初恋の予兆に胸躍らせつつ立ち尽す、幼い話者の一心に見開かれた眼である。

そんな話者の傍らを、ジルベルトという名が駆けぬけて行った。

それは〈云わば護符のように私に授けられた名であり、その護符のおかげで、私はきっといつかまた彼女と再会できるだろう。(I. p. 142)〉

意中の少女との思いがけない出会いに戸惑う話者の、思わず見開いた眼は、全身の感覚が身を固くし、てんでに身を乗り出して凝視する窓に喩えられ、また、ふと耳に届いたその娘の名は、霊験あらたかな護符に喩えられて再会の望みをつなぐ。

こうした家族そろっての春の夕べの散歩が終わる頃、とある町角を曲がると、思いがけなく自宅の裏木戸が現われ出る。〈父はまるで鍵といっしょに上着のポケットからとり出したかのように、眼の前に立っているうちの庭の木戸を私たちに示すのだった。(I. p. 115)〉

そして、ここまで来れば、もう一歩も歩く必要はない。なぜなら〈(勝手知った我が家の庭の）地面が私に代って歩いてくれ（……)〉〈「習慣」がその腕に私を抱き上げ（……）私を幼な子のようにベッドまで運んでくれる（ibid.)〉からである。

散歩の道案内を父にまかせて安心しきっている家族た

ち。手品師のように我が家の裏木戸を示す父の得意顔。そして、我が家にたどりついた安心と、快よい疲労と共に寝に就く幼い話者の満足感。いかにも微笑ましい比喩の連続である。

なお、あとの二つは擬人化比喩である。(2) なおまた、〈幼な子のように〉の部分は、比喩の中にはめこまれたもう一つの小さな比喩である。

これらの例に見られる如く、いずれも洒落た楽しい比喩である。ユーモア比喩とちがって、対象は必ずしも《人間》には限られない。また、そこに醸し出されるユーモアも、いわゆるユーモア比喩のそれとは異っている。ユーモア比喩の方は、対象となる人間を（それに対する愛憎の多寡はともあれ）批判的に観察し、その上で一捻りした解釈を下そうという姿勢が多少とも見られる。それに対して、これら機知的比喩は、対象に注ぐ話者の温かい眼ざし、対象に密着し、時には対象と一体化しようという姿勢が感じられる。観察の眼が対象のそば近くににじり寄っている。云わばズームインした描写という印象である。

例えば、

〈（シャンゼリゼ公園の露店の玩具屋で、話者はビー玉を買ったが）かたわらの木椀に捕虜のように入れられて光っているメノウ玉の方に見とれていた。(I. p. 402)〉

子供の手に買い上げられて遊びに出たがっているメノウ玉の気持を、話者は《捕虜》に見たてている。

また、早春のマロニエは〈（氷のように冷めたく流れる大気の中にひたってはいても）時にたがわぬ春の招待状を受け取って、すでに正装して (I. p. 391)〉おり、春を待ちわびる話者の気持が、芽ぐむマロニエに仮託されている。

一方、夏のにわか雨の中のマロニエは〈まるで夏の保証人でもあるかのように、雨の夜を徹してそこにとどまることを約束し (I. p. 152)〉、まだまだ晴天が続くのを請け合ってくれているのである。

つまり、ユーモア比喩は、対象を一段の高みから見おろすが、機知比喩は、対象と同列の視線から生まれると考えられる。

しかしこれだけでは説明のつかない部分がある。更に幾つか実例を見てみよう。

話者は念願の芝居見物の許可を、ようやく両親から取りつけはしたものの、母の譲歩に気がとがめ〈（芝居の広告柱を見に毎日のように出かけて行くのだが）実は数

日来それが柱頭行者のような苦行になっていた。(I. p. 444)〉

幼い良心の呵責を苦行僧の苦しみに比しただけなら、平凡な比喩にとどまったろうが、《広告柱——柱頭行者》という、《柱》を仲介にした連係を添えることによって、堅固な、しかも知的ユーモアのある比喩に仕立てている。

庭に出た祖母は〈(通りすがりにこっそりバラの副木を何本か引抜き、バラの花を少し自然な姿に戻してやるのだった。)あたかも、床屋が撫でつけすぎた息子の髪に手を入れて、ふっくらさせてやる母親のように。(I. p. 14)〉

《整いすぎたバラを自然な風情に戻す》——《整いすぎた髪型を自然な風情に戻す》という連係の他に、両者に共通した《母性愛》が、眼に見えぬ強力な結着剤として作用している。

有名なプティット・マドレーヌは〈あたかも、水を張った茶碗に小さな紙きれをひたして日本人たちが楽しむ遊び(I. p. 47)〉のように、遠い日のコンブレの暮らしの全てを、一瞬のうちによみがえらせる。丸められた水中華が伸びひろがって花となるように、記憶の底で干涸び縮こまっていた様々の形象が、一時に花開く。しかも、一方は一盛りの水の中に、他方は一碗の紅茶の中に。

コンブレの夏の晴れた昼さがり、鎧戸を閉ざした室内にいると、〈外のすばらしい光の感覚は、私の眼の前で小さな楽団を組んで、夏の室内楽を奏でている蠅たちによってしか伝えられない。(I. p. 83)〉

光をさえぎられた室内に群れる蠅たちのひそやかな羽音は、サロンの奥で演奏される静かな室内楽を思わせるばかりでなく、或る楽曲が或る季節と分かちがたく結びつくことがあるように、蠅の室内楽は、今年もまた夏がめぐってきたこと、夏のさ中に身を置いていることを、しみじみ話者に実感させるのである。

多情なスワン氏の好き心は、パリにいようと旅先であろうと自由にその本領を発揮する。〈彼は自分の交際関係という建物に閉じこもることなく、そうした建物を、気に入った女のいるところどこにでも新らたに建てられるように、ちょうど探険家用の折畳式テントのようなものに作りかえていた(I. p. 192)〉のであり、またそうした女との取持ちを依頼する彼の手紙は、外交官的巧妙さに満ちており、〈その外交官的みごとさは、次々に変わる恋愛と種々の口実を通じて一貫し、(……)(彼の)変わらぬ性格と同一の目的とを際立たせていた。(I. p. 193)〉

前者は、スワンの交際術の闊達さを携帯式テントに、加えて、猟色家を探険家に結びつけており、後者は、スワンの依頼文書を外交文書に、またその手練手管を外交官的手腕に喩えている。

バルベックのグランド・ホテルの食堂で供された舌びらめは〈私たちの皿の上に骨の羽飾りを残し、その羽飾りは羽のようにカールし、古代の竪琴（シタール）のように響いて鳴った。(I. p. 674)〉

文法上は、《羽のようにカール》し《竪琴のように響く》ところの《羽飾り》、と読むべきだが、読者に読みとられてゆくイマージュの順序から云えば、《舌びらめ》が《骨》に、《骨》が《(帽子の)羽飾り》に、その《羽飾り》が《羽》のようにそり返って《竪琴》に変ずることになる。連続メタモルフォーズと云ったところだが、骨の形、その色ともどもに無理なく変身をとげるばかりか、最後に逢着する《竪琴》のイマージュは、この海浜の格式ばった大ホテルの食堂の、何やら古典劇の舞台装置めいた雰囲気までも伝えてくれる。

こうして見ると、この種の比喩は、比較的短文であることに加えて、比喩の結びつきがしっかりしていることが判かる。喩えるものと喩えられるものとの間の連係理由が、一つだけでなく、必ず二つ三つと隠されてあって、その分、結びつきが堅固緊密になっているのである。

更に次のような例がある。

〈(長い闘病に倦じた叔母は、フランソワーズを敵役に仮想して、ひねもす一人二役の対話劇を空想するのであったが)時にはそんな《ベッドの中の芝居》に飽き足らなくなり、実際に演じてみたくなるのであった。(I. p. 117)〉

《ベッドの中の芝居》は、云うまでもなく spectacles dans une fauteuil（安楽椅子で見る芝居）にかこつけた比喩であって、そこから直ちに《上演されることのない芝居》という共通項が浮かび上る仕組みである。

〈(身分違いの婚姻によって客足の遠のいたスワン家のサロンでは、多少とも名のある人が訪れると、誰かれなしにそれを吹聴してまわる)ちょうど、電報を麗々しく貼り出しておく温泉町の旅館のように。(I. p. 513)〉

落ち目のサロンと、田舎の温泉宿との符合は一読して明らかである。

〈級友ブロックは育ちが悪く、神経症で、スノッブで、おまけに資産のない家庭に生まれついたために、まるで海底にへばりついてでもいるかのように、計り知れぬ重圧に耐えていた。(I. p. 744)〉

成上り志向の典型ブロック氏は、社会の底層魚さながら、頭上幾重にも重なる階級の圧力につぶされまいと、ひたすら忍従の日々を送っていた。

いずれにせよ、これらの比喩は連係理由が非常に明白である。

更に、以下の例では、連係理由が文面にはっきりと表われ出ている。

〈(話者マルセルの家の下女中は、女中フランソワーズのいびりにあって誰一人長くは居続けない)下女中はまるで法人のようなもの、常設機関のようなものであって、構成員は次々変わっても、その機能と権限は一定不変であった。(I. p. 80)〉

絶えず人が入れかわる下女中を《法人》と見なす理由は、そこに働く個人そのものよりも、全体として果される職能こそが重要だという点にあり、それが文面に明言されている。

〈(社交界に飛びかう警句にも流行りすたりがあって、一度用いたせりふはしばらく使用を見合わせねばならない)なぜなら、それらお歴々の教養は輪作のようなもの、それもおよそ三年一めぐりの輪作のようなものだったから。(I. p. 462)〉

短い比喩の中に、《教養》を意味する culture と、《耕作》を意味する同じく culture とを繰り返し、更に《間欠的使用》という共通項で括っている。非常に効率のよい、しかも明晰な比喩構造である。

先程のバルベック・ホテルの昼食の舌びらめは、〈皮製の水筒とでも云ったレモン(I. p. 673)〉から、金色の果汁をふりかけて食されるのであるが、この場合、レモンと水筒を結びつける最も強い要因は《皮製の》という限定辞にある。これによってレモンの形状、感触、そして貴重な液体をたくわえる容器としての機能が、水筒というイマージュに無理なく合致する。(3)

逆に、例えば

〈我々の記憶はショーウインドのある店に似ている。その窓に同じ人物の写真が飾られ、時々ポーズの違う写真に入れ変えられるのであって、普通には最新の記憶だけがしばらく眼に留まる。(I. p. 890)〉に於て、比喩部分は《我々の記憶はショーウインドのある店に似ている》という箇所であって、充分短い。《その窓に……》以下は連係理由である。ところがせっかく理由が明記されているにもかかわらず、その理由節が長く、またやや一般性に欠ける為、ここには知的ユーモアは感じられない。

このように、連係要素が多いこと、及び連係理由が明

白なこと、しかも短文であることが、この種の比喩の特徴と云える。

一方、

＜（コンブレの夏の昼さがり、カミュの店で木箱を修理する物音が響いているが、音は暑い天候に特有の、よく反響する空気にはねかえって）深紅の星くずを遠くまで飛び散らせているかのようだった。（I. p. 83）＞

或は、

＜（記憶の中の様々なアルベルチーヌは）あの多様な海――私が便宜上単に海とだけ呼んでいるが、実は次々に変わってゆくあの多様な海――に似ていた。（I. p. 947）＞

などの例は、ほとんど機知的面白みを感じさせない。むしろ感覚的、詩的な比喩という印象が優勢である。前者に於ては、暑気の中に響く金鎚の音と、深紅の星くずの飛散との結びつきが、知的なものでないのが原因である。つまり連係理由が明白でない訳である。連係理由のあらわな高密度比喩が、短構文の中にはめこまれた時、はじめて機知的比喩となるのである。

また後者の例では、海とアルベルチーヌが、単に≪多様性≫のみで結ばれており、それ以外の共通点がない。つまり連係度が低い訳である。

しかし、この≪海のようなアルベルチーヌ≫には、何か遙々と人の心を誘うものがある。単なる弱い比喩として読み過ごせないものがある。後に≪ゴモラの女≫となって話者を苦しめるアルベルチーヌも、はじめはバルベックの浜辺を闊歩する花咲く乙女たちの中の、名も知れぬ一員に過ぎなかった。いつも群れつどっている彼女らは、海の申し子の如く、好んで海のイマージュに結びつく。

＜あたかも一群のかもめがどこからともなく上陸して、なぎさの上を（……）歩調をそろえてさまよっているようであり（I. p. 788）＞＜彼女らの群を通して、一種の調和をもった波動のようなもの（I. p. 790）＞が伝わって来る。＜これらの若々しい花（少女たち）は、懸崖の上の庭を飾るペンシルヴァニアばらの茂みにも似て、そのきゃしゃな生垣で、私の眼から波の線をさえぎっていた。（I. p. 798）＞＜（彼女らの一群は）ポリプの母体から成り立っているあの原始有機体のように（I. p. 823）＞群生しており、＜（アルベルチーヌと外出の約束をした私の言葉は）まるで底知れぬ深淵に石を投げ入れたように、どこまで落ちて行くのか、どんな結果を招くのかもわからなかった。（I. p. 881）＞＜（彼女らの表情の定まりない変化は）海を前にして人が想うあの原始の

元素の、絶え間ない創造のくり返しを連想させるのである。(I. p. 906)〉

等々、彼女らに結ばれる海のイマージュは、枚挙にいとまがない。こうした海辺の乙女たちの群の中から、徐々にアルベルチーヌが姿を現わすのであって、海とアルベルチーヌの間には、単に《多様性》という共通項以外に、実に豊富な地下水脈が潜んでいるのである。《海のように多様なアルベルチーヌ》という比喩は、読者に無意識のうちに、こうした海との連関を想起させる作用をもっている。従って機知的比喩とは違って、非常に奥行の深い意味内容と連想作用をもつことになる。

次の例は、機知比喩と詩的比喩の中間あたりに位置するものと云えよう。

《(馬車で行くバルベックの野原には) 古えの巨匠たちがその絵に署名したあの貴重な小花のように、コンブレのそれに似た矢車草が、品質保証のマークをつけつつ、この野原を一層本物らしく見せながら、ためらいがちに私たちの馬車の後を追って来るのだった。(I. p. 711)》

《点々と咲く矢車草は、昔の巨匠がサイン代りに描いた小さな花のマークのようだ》という部分は、前に引用した《タピスリーのふち飾りのような矢車草》に似て、機知に富んでいる。しかし今回の矢車草は、幼時より親しんだコンブレのそれに似ているが故に、このバルベックの野を一そう本物らしく見せ、云わばその品質を保証しているかに見える訳である。比喩内容の一部が比喩の枠内では完結せず、物語の過去の中へとはみ出している。従って、知的面白みを感じさせると同時に、何かしらあえかな郷愁めいたものをも感じさせるのである。

こうしてみると、機知的比喩は、比喩自体が《独立》していることも重要な条件となってくる。物語から独立しているということは、仮りに比喩だけを切り離しても充分その表現内容が読者に伝わるはずであり、また、この種の比喩は物語世界にその存立の基盤を仰がず、云わば一人歩きの出来る、一種の普遍性を持った文脈を形成していることがわかる。知的快感の生じる原因の一つがここにもありそうである。

更に幾つか例を見てみよう。

〈(話者マルセルは、自身で文章を書く苦しみから解放された時、初めて他人の文章を楽しむことが出来た) あたかも料理人が、自分で手をくだす必要がなくなって初めて、美食家となるゆとりを見出すように。(I. p. 96)〉

一読して、非常にシンメトリカルな印象を受ける。連係関係は、《文筆家——料理人》《文章を書く必要がな

くなった時――料理に手をくだす必要がなくなった時≫≪他人の文章を楽しむことが出来る――(他人の)料理を楽しむことが出来る≫という三項目になっており、それぞれが過不足なく、ぴったり重なり合っている。構文は短かく、連係密度は高く、連係内容も明々白々である。しかも、動詞が現在時制に置かれていることからも判るとおり、云わば永遠の真理という形で、一般論として述べられており、従って普遍性を具えている。しかしそれにも関わらず、さほど面白い比喩とも感じられない。鮮やかさがない。その原因は、≪文筆家――料理人≫の関係が、この場合、類縁的すぎることにある。機知比喩に限らず、およそ全ての比喩は、喩えの対象を出来る限り意外なもの、思いがけないもの、つまり縁の遠いものから借りてくるべきであって、似たもの同士を比喩で結んでみても意味がないのである。

それはさておき、この例ほどに、比喩関係が密接になると、喩えるものと喩えられるものの関係を逆にしても、比喩は成り立つのである。つまり、＜文章を書くことをやめた時、初めて他人の文章を楽しむことが出来るように、自分で手をくだす必要がなくなった時、初めて料理人は美食家となるゆとりをもつ＞という逆比喩が出来上る。ひっくりかえしてみても、何ら比喩関係に損傷を受けない。このままで充分通用するのである。

比喩が逆転できるかできないかは、機知比喩の性格を考える上で参考になる。≪AはBのようである≫をさかさまにして、≪BはAのようである≫と云いうるのは、AとBのもつ比喩内容が、全て一致している場合に限られる。AとBが比喩内に放出する概念の外延(extension)が等しい場合にのみ可能なのである。

例えば、先きの＜アルベルチーヌは多様な海に似ていた＞をひっくり返すと、＜多様な海はアルベルチーヌに似ていた＞となる。一見逆転可能に見えるが、それは≪アルベルチーヌ≫の一語に、すでに見たとおり、海との観念連合が数々包含されているからであって、正確な逆比喩は、＜多様な海は、或る(無名)の少女に似ていた＞とならねばならない。しかしこれでは比喩として成り立たない。≪アルベルチーヌ≫の意味内容が≪海≫より遙かに大きいからである。つまり両者の外延が等しくないからであり、従って逆転は不可能となる。

他の例を見てみよう。

＜(コンブレを駐屯部隊が通過する日は、ふだんそんな習慣のない家でも、召使や主人までが戸口に見物に現われ)あたかも大潮が引いた浜に、ちりめん織のような海藻や、貝殻の刺しゅうが打上げられるように、彼らは

気まぐれな、くすんだ色あいの縁リボンでもって門口を飾っていた。(I. p. 90)〉

ふだんは海底にあって人目にふれぬ海藻や貝殻が、大潮によって浜辺に打上げられるように、ふだんは姿を見せぬ住人が、軍隊の行軍に誘われて門口に現われ、通過後もそのままたたずんでいる、という内容である。(4)

この逆比喩は、大略次のようになる。

〈大潮の後の浜に残された海藻や貝殻は、時ならぬ行軍を見に門口に出て来て、去りがてにたたずむ村人のようだ〉

奇異な感じは無い。《ふだんは隠れている存在を、大きな変動が人目のふれるところへ誘い出し、しばらくそのまま放置する》という意味内容を伝えるだけなら、正逆いずれの方向でも構わない訳である。ただし、この例の場合、かんじんの《大潮》と《行軍》とが、いま一つしっくり嚙み合っていないため、比喩としての表現力が弱まっているのが惜しまれる。

別の例に移ろう。

〈(バルベック・ホテルの夕暮れ、灰色に沈んだ空と海の地色に、ほのかなバラ色が掃かれ)折から窓の下部に眠っている小さな蝶が、ホイッスラー好みのその「灰色とバラ色の調和」の下に、その羽でもって、このチェルシーの巨匠のお気入りの署名を記しているように見えた。(I. p. 805)〉

ホテルの窓から見える灰色にバラ色のかかった風景が、ホイッスラー(5)の「灰色とバラ色の調和」の画面に似ており、更に、折から窓ガラスにとまった蝶の姿が、ホイッスラーの署名の蝶の印に似ている、という構図である。

逆比喩は、〈(ホイッスラーの「灰色とバラ色の調和」に記された蝶の署名は)灰色にわずかなバラ色をまじえた風景の眺められる窓に、小さな蝶がとまっているかのようだ〉となる。《灰色とバラ色の風景の見える窓》が、やや一般性を欠くものの、比喩そのものは何とか成り立つ。

もう一つ、

〈バルベック湾は(大きな世界の中の独自の小世界で)、四季を盛り合わせた籠のように、様々に変わる日々と、次々に移ろう月とを、円形に寄せ集めていた。(I. p. 674)〉

まさにこの逆比喩を、話者自身が作ってみせてくれている。

〈(リュクサンブール大公妃から届けられた果物籠は)この湾(バルベック湾)のように、様々な季節を一つの

籠に盛り合わせていた。(I. p. 698)〉

要するに話者の脳裡のバルベック湾は、変化に富んだ豊饒な別天地として、季節の実りをとりどりに盛り合わせた籠の、豊かさのイマージュと分かちがたく結びついており、《湾イコール籠》であっても、《籠イコール湾》であっても、全く変わりはなかったのである。

しかしその結びつき自体には、他人の容喙を許さない個人的な追懐の深みに由来する部分があるらしい。従って正逆二つの比喩とも、機知比喩の必須要項である連係の明白さを持たない。結果、読む者の印象としては、知的な面白みよりも、漠とした感覚的美しさが優勢となる。

同様の性格をもつ比喩は他にも多い。中でも美しいのは次の例である。

〈(幼い日の、寝つかれぬベッドでのすすり泣きの思い出が、時をへてよみがえってくる。いま再びそれが耳に聞こえてくるのは、生活が前より一層静かになったからに他ならない)あたかも僧院の鐘が、昼の間は街の物音にすっかりかき消されて、もう鳴らなくなったものと思っていたのが、夕べのしじまの中で再び響きはじめるように。(I. p. 37)〉

幼時のすすり泣きを、かそけくも澄みきった鐘の音に喩え、晩年の心境を夕べのしじまに喩え、遙かな虚空へ、遙かな過去へときき耳をたてる話者の姿を浮かび上らせ、緊密で均整のとれた比喩に仕上っている。

しかしこの場合も、《ベッドでのすすり泣き》の一語に、諸々の観念連合がまとわりついており、もしこの比喩を逆転させようとすれば、かなりの量の状況設定辞をつぎこまねばならないはずである。これが機知的比喩でないことは、こうした構造の上からも明らかなのである。

このように、比喩の倒置が可能か否かを確かめることは、その比喩の連係要素が、相互に無駄なく結合しているかどうかを見きわめる上で有効である。そして、高い連係密度を要求する機知的比喩に於て、この種の倒置可能型の比喩が多く見受けられるのは当然と云えよう。

以上をまとめると、比喩が知的面白みを帯びる条件は、比喩構文が短いこと、喩えるものと喩えられるものとの結びつきの理由が明白であること、同じくその結びつき方が緊密であること、比喩内容が一般性をもつこと、最後に(これは機知比喩に限らないが)、意外な取合わせをもった比喩であること、の五つがあげられる。

つまり、この種の比喩を喩えるならば、一種の謎々あそびに似ている。

≪下女中とかけて、法人と解く、その心は、人が変わっても働きは同じだ≫という、あの遊びである。

註

(1) このように同一のイマージュを幾つかの比喩に連続して用いる技法も、プルーストが得意とするところである。典型的な例は、ラ・ベルマの「フェードル」上演中のオペラ座内部が、海底のイマージュを基調に、延々数頁にわたって描かれる部分である。(II. pp. 38-44)

(2) 「フランソワーズの古代法典」、註の(3)を参照のこと。

(3) レモンと水筒という大小の差異はほとんど気にならないばかりか、逆に、レモンほどの小さな皮水筒を想起させ、一種のミニチュア効果とも云うべき、可愛らしいイマージュを派生させる。

(4) ＜ちりめん織のような海藻、刺しゅうのような貝殻＞の部分は、比喩の中の比喩、やどり木のような比喩である。

(5) アラン・ロジェは Whistler の綴りから Wh- を除けば Elstir のアナグラムが出来上ると指摘している。(Alain Roger: Proust, Les plaisirs et les noms, p. 145)

使用図書

Marcel Proust, "A la recherche du temps perdu (I, II, III)", Paris,Gallimard, 1954.

参考図書

Alain Roger, "Proust, Les plaisirs et les noms", Paris, Denoël, 1985.
Lester Mansfield, "Le comique de Marcel Proust", Paris, Nizet, 1953.
Jean Milly, "La phrase de Proust", Paris, Larousse, 1975.
Gaëtan Picon, "Lecture de Proust", Paris, Mercure de France, 1963.
Roland Barthes, etc., "Recherche de Proust", Paris, Seuil, 1980.